あんりきうこうを
ちきへんのかくれか

養洲以藏

# 於女忠物語

菱湖卷大任題

九曜文庫

天保八酉春日
三亘書屋梓行

## おもの物語

ゑどにあつまりて。おあんなるものこの物ごとなれば。なやれませといへど。おもしろの釈文は。山田吉庵と いうて。石田治部少輔殿よりの使者。あふみの国 根小屋城。そのうち。治部どのは。関ヶ原合戦時。 美濃の国おほ垣城にしろへおもりて。家こみなく一所ふ。ほ城よりおて。おもやつこの。不思議ふ ゑど。おどりやつこよりなく。九つ時ふ。ふ殺らるゝ。 くゝ男女三十人ほどのおもゝて。田中兵部どの

う。四平無ア反のうと。おんきて。そのあとをて。わつ
どううてなく孝ガ。ぶ。ぶ。ーておだやいろ。おどな
こや〳〵。おろ〳〵。おどやつこそのほ。家康
様ごり。せめ。ぶ。大勢城へむこのはれていくけこの。表
をるおだやいりものそのを手ぶ大物を。四平兵
ぶ反ごりすで。おだやいろ。火矢ばうちはを。
しぶぶ迫反を。鍋四てり。おだやいろをはふぜ
ぶりやぶ石火矢をうてば。格もゆるゝうごき。地をさ
けまやうふ。すさまじいさこのふ。事ぶよる記婦

人なぞハ。ぶ時ふ目を。ぶをして。雑兵した。それ
ゆるよ。まへこのあにふれておいあ。そあをごゐ
ぱ。ぴこりものでこ。このみぶり。ぶ。ぶをまつやう。ぶ
心ーておだやつふ。はじめのほどハ。ぶ。ぶたさ
こちらあなく。をでものおそろーやこはやとぶ。
ますを人おそふこの。ほこをふんとおだやろ。
じやなん。ぶ。ぶ。毎人もそのほの。ぶ中乃。内傷むた
ぶこちらもみはり。天ちふ。ぶ。ぶ。鉄砲むを。待ぶ
しあ。まふ。味こうこ。ぶこうこ。首を。天守へあつめらを

てそれ〳〵に札（ふだ）をつけて覚（おぼ）へおき。さい〳〵くびに
おはぐろを付て。おじやる。それハなぜなりや。むかしハ
おはぐろ首（くび）ハ。よき人とて。賞翫（しやうくわん）したり。それ故（ゆゑ）しら
歯（は）首（くび）ハ。おはぐろ付て給（たまは）れと。たのまれておじ
やつた。くびもこはいものではあられぬ。その首ど
もの血（ち）くさき中（なか）に。寝（ね）た事でおじやつた。ある日（ひ）。
よせ手（て）より。鉄炮（てつはう）うちかけ。もはやけふハ。城（しろ）もおち
るとて。殊（こと）の外のしろのうちがさはいだ
さうで。おじやつた。そのところへ。おさ来て。敵（てき）の

げなく。さわがしかつた。もちそや。おさなきまでおかされな。
しづまりかへつたところへ。鉄炮（てつぱう）玉が来（き）りて。それら
おらが。十四歳（さい）に成しものよ。あたりて。そのまゝ
まゝひり〳〵として死（しん）でおじやつた。扨（さて）もすごい
事にて。おじやつた。その日（ひ）。親父（しんぶ）乃持
口（ぐち）へ。矢文（やぶみ）来りて。玄暦（げんりやく）ハ。家康様（いへやす）手（て）な
らひの御師匠（しゝやう）申されたれば。ある由もあるものゝ。志やそ
ども。城（しろ）をのがれたくば。のがれよ。何方（いづかた）
へなりとも。おちよ。路次（ろじ）のまづらひも。何

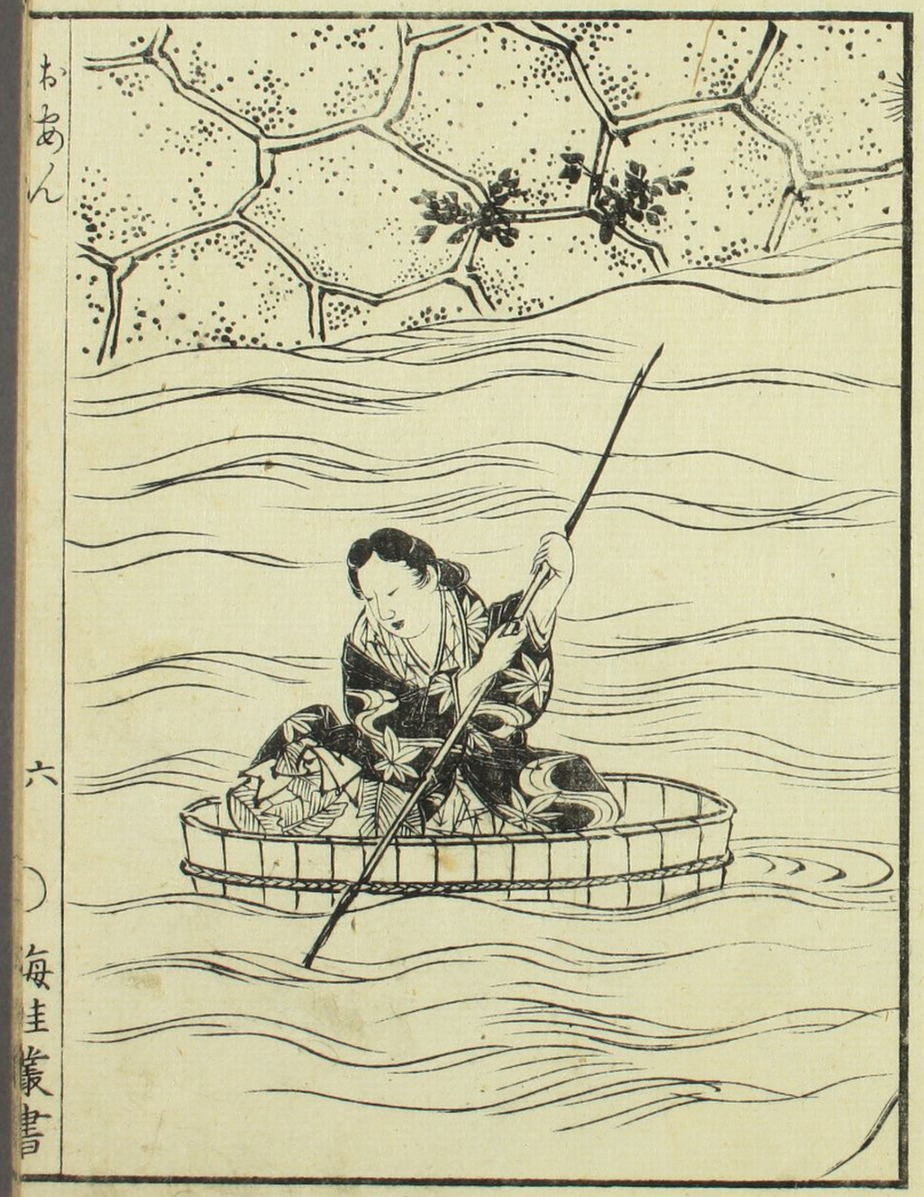
おあん
蒼清

ご。読て見へ。おほを見つゝの話事でおゞやけつ。
し。詞の。望ゝ日中。せめおとやるくゝ。みる。
ちこの話を。為して。重ねも。明日ハうしなそれは
はも。心ぼそくゝ。思ひて。おゞ屋つゝ。釈文ひそこの。
天守へまゐられて。はす方へ。来いやて。母人。我主を
もつ話て。小話嬉わきら程。はゝごを。この宣て。ぼり
脱りて。下へ。釣さげ。さて。めらひ。ふゝく。城を。
このうへ。滑りて。おゞやつ。その人。数ハ。おやちふ
くる。わらハと。松ゝ。四人。ばつり。そほの。影来ハ。

そのまゝふて。おゞやつ。城をはるきゝ。ハい町おゞ。小
へ。ゆし。時。母人。ふはつふ。後ハ。ものみて。娘をうみの
ひも。松と。形。そ。ほ。田ゝ。水。そう。娘。湯つ。ひ。ある
げて。ぼまふつゝみ。ぼ。人。そゞ。釈文。ハ。ふて。ぼを
壁ご。原。話。ふ。人。義。ふ。おゞ。やつ。ぼハ。ふ。ぼ。おゞ
屋つふ。のう。ものし。清つふ。南。雲。原。跡。
又ふ。ども。表根。乃。まゐ。義。よと。いつば。おゞ。釈
父。知行。三百石。とり。て。石。ら。れ。ものゝ。その。時。ハ。ぼ。
ご。多。て。何。も。不自由。な。事。で。おゞ。やつ。句。海。



おあん


おあん

武清

用意ハ。めん〳〵たくはへもあれども。多分。朝夕雑炊をたべて。おじやつた。おれが兄様ハ。折〳〵山へ鉄砲うちにまゐられた。其時に。朝菜飯をかしきて。ひるめしにもちられた。其時に。我等も菜めしをもらうて。たべておじやつたゆゑ。兄様を。さい〳〵すゝめて。鉄砲うちにいくとあれば。うれしうて。ならなんだ。さて。衣類もなく。おれが十三の時。手作のはなぞめの帷子一つあるより外にはなかりし。其のひとつの帷子を十七の年まで着たるによりて。すねが出て。難儀にあつた。せめてすねのかくれるほどの帷子ひとつほしやと。おもうた。此様にむかしは。物事ふ自由なる事でおじやつた。又ひる飯などくふといふ事は。夢にもない事。夜に入て。夜食といふ事もなかつた。今時の若衆ハ。衣類のもんずきに心をつくし。金をつひやし。食物にいろ〳〵の好みごとめさるゝ。沙汰の限なこととて。又しても。彦根の事をいうて。しかるゆゑ。後にハ。子ども達も。名を。ひこ根ばゞと

おあん
武清

いひ。今も老人のもつみる銭引て。当世ふる
すとば表根をいはゆと。俗流おいふ。この人よりはじ
ゆめしるなり。そのあと他国にその小ハ毎ぜず。流
国郷談なり理。

右吉磨土物釈歌、丈へ下り浪人土佐本て、山田荘助。
後ち輔也と号し。おあんハ毎夜伝ちゆへ嫁ち。
後ち浦へ死して後。山田荘助妻育ち荘
助の為ハ。姑母なる寛文年中。そそひい十
歩ち。て来て。夢その頃。八九年ハ。て。右ち

物ごとり銭。打て。ちく覚くあり。誠ハ先ハ矢ち
ぬ。とのや。心徳乃ち。孫ハ。孫ハ。孫ハ。
て。式ちの。て。て。て。て。て。て。て。て。
中の費銭。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
おあんハ表根ぞ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
をおぞやるぞ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ふゆ。後。て。て。て。て。て。て。て。て。
いのあらむ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
疑きんと。号銭。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

おあん

まいらせ。ら程。ほうあるいふ。庵まち事かのもの。

右一通。事実詳悉。孫弟等。ねんごろ。

や。未詳。ほらくは。山田氏の写書かゝ。田中

文庫藏本。ものに所持をこゝろ出し。本ノマヽ。とゝ。

志の程。

享保十五年庚戌三月廿七日　谷垣守



跋御庵物語

散樂狂言脉倉合盆左衛門門人其。安永年間。自大坂持来此書。且謂。狂言所云比丘貞者。蓋演之也。從是。此書始顯人間云。余按。比丘貞狂言。有々皆叺余所居。稱曰御庵之語。則御庵非名也。其叺所居稱其人。猶僧曰御坊。娘曰御寮。今此書曰御庵。亦盃尼尊稱也。但爭蹟與比丘貞。毫不相渉。叺其適同其稱。誤為比丘貞狂言所出。然此書。由是叺顯。亦可謂幸矣。丁酉十月。善庵盃人題

蒔塘培書

# おもてなし物語

芳洲巷大住歌

三の丸屋花

松平文庫

おきく飛語

田中意徳（池田家の儒也）祖母ハ。大さこのふて。よゞ長ゝ。ほ
この毫一人まて。名を。書くとゝそ少ひくら。薇墻
乃日。元和元年五月七日なゝつゝ居やひ。おのゝいま
ゝ。らく珠なゝはおもひそゝらぬはよそばの杉
のまはるを。こうまを。して。その下ゝ。ますやはた。是也。
そばゝ焼めして。年とゝやはるゆゑ。そのとゝ。
長尾へまゐる。むつくりはうた
ゝ。やゝまひとゝ申ゝ。そのほゝのゝこゝ。ゝ。
おきく

かくとかんじ所作ちよだめちゆゑ。ちんぶおもじ
む乃御縁のはへ出ましく。おもよく何つるもの
えは由ゑ出ゐんかは。へば。なるほどとよろこび。
尼さまてゆゑ。はおるへの亀り幅子取り
生いだし。三つのきめて。六帯も三つして。秀
なまに成り。拝領のごみえし懐中して。御魔
ござ給へ。出ませば。武田御宗翁ら給さ具
御息荒て。おもやは女給のふ見せらざるは
ゆらひも。二人様やは。女中ま。あるひは知らざ

る士は家ら出給外にて。肩衣の肩ず取りて
給まれ上おびをも志めて。まけりゆへとや
こゑきの写おがら。みんな女中。中八めは一己の志給
さうぶやこのまひやさんださし。いそめ出かは。
女中のふいでられやさびゆやうふ栄翁やらへ
ども。それもの御ひやさず。出かはその辺り
金は瓢箪の馬志るし。いこのびして。おかし
おもふむられある之は手長のされ。その手な。どやう
まのおもしろやとやすいまへしてえて。すて

おきく

ふいてはほろ〳〵とあらはれなりて。こゑてあ
めぐて。はけるそれをもすて。やう〳〵堀のへ
出やうとする。竹束をこゝかへども。武者もを
ものはげ。まつ堀中城分をすそえもぐる
まへ。手あしをもつえ不ゆかず。忠の助。先東
おこのげより。もとくまんひとつ。若ものさび
ごのもな。ぬきもらてまりをまつらば。出
せとぶふめり。怪ものよ。竹なぐこ本もらて
ありし。ぶ〳〵つの。一本七五郎が
まゝとふ。さて。それ



ものふやは。藤堂藩。活捕る。ぶつのあそこ
へ。まつ原にとゝまけるゆゑそれとまろ〳〵つ
ゆきはぐ。まつ〳〵。金ならせる百つまり
られとたのむ。ぶこ竹方つゝ。同道いてまま
ぬるうちよ。要光院。京極美濃守殿母儀。
ふ。おそれまひあとり。浅野殿のほんぶ。さて
のきはそれほの。女中ものはりまつ。
をみつ。すれそこまへかけり。よりぶ
まうし。森に。ある生家へ。ぶ

こもも〳〵ゐをしき。ゑこでふ。ゆるさぬ。取
いぐ〳〵て。要光院殿をば。そのうへふ。れ家ゝは。い
ぼき戒。そのもゝ〳〵。そのうへひろのきいづるゆか
まり〳〵ゐらも。彩色よこは。飯まちひをみな
く。紙ものせ。さべひ。これいあ捨ちゐよりはりしな
ゐて。ほ和睦のほ使は。要光院どの坊中に出
ゐまて。ほてほ。そのうちよ。義城ゆゑや。そは法性の女中
のうちふ。秀頼公ほ。ほめ〳〵つのひ。ゐ女中。少城高尼
見ほ。ゆゑ。かゝ。ぞ。ら〳〵つる。下ゐび。ゐひとうて。
取られひ由。それ。ゐて。その。義ゐば。ゐべ〳〵て。



わゞ性ゐとひとつぬぎ。いゐびもゐとつきて。
その女中。ゐ。ゐらせけるさて。要光院殿は。
家康公へ。法ゐ。ふ法。ほ出ひほゐもゐひ。法
のり物なゐ。よゐるそのとき。女中へ。ほらまひ。
ゐ。　将軍様。ほ。ありて。いづ法ゐ。女のゐなま
ど。ゐ。女中ゐ。ゐりゐるゐのいゐやうる。ほつ
けらほゐまゐ。ほれゐ。ゐへば。法ゐよ。ゐくゐべ
くひ〳〵ゐ。ゐ。ゐ角法ほ知ハ。ゐもゐわゐ。ゐ法し
ゐへ〳〵。要光院殿ゐ。ゐ法ゐ。ゐ時ゐ。

村田蔵書

なまこの酢もの　もさと。おぞ〳〵し。近付話のつり
ちさそれゆて。話こりは出とぞなきうちふ事
すみりて。のもぞなのぞみ決定いづうこも。
おこ話つのはそ屋きより。上言とあはぞみな
こ話ちぶるぞかぶりおしうのき。おくる。松丸
屋〳〵まりはほんとぞん京者へとてそ糸り
たるさてそち言内もそいづるへゆづき
ごこ話もおぼつのれくゆる。一仕すぞたのまれ
ゆゑ。一所て京へ糸ゆて。大さこうて知る



町人へ。もとうて。まるる屋。法様そは。の話く
ねゆ町人へそは〳〵ぞ我。ことのか大きゆる町人ふ
て。志うぞ。ふそ大きこうそ義人ゆゑ一本も得
どめやさぞ。あ人へ。脇布一疋て。引出とのふぞ
しけるぞて。あ人へ。織田たつ屋の屋まへ。まる
屋〳〵ぞ。ぞの〳〵。門内へも〳〵ぞ。ぞ内姫
ぞ。たつ屋姫ゆゑ。京ゆゑ。ふこは姫ぞて
ゆふそれそそ。西入なまやとうる付まへ内へ
ゆ言ふれゆ。ことの。食屋まて。たつ屋め

おさく

ひなどもいろ〳〵。そなへひめりとて。鉢のほの穂にて
ありし。扨の日。古門どの〳〵。遠国のうちのやし
げふるこ階へ。ひぐ程。二人。うるはしきりゆひそふる
て。きもく食など。ゐべゆひて。いとゐやて。松の花
殿へ。まゐりゆそんとすれば時。たつどのさとのほの。雅
うそ。むくびらふ。飯るる松。ゐまはりらさて。書
の花殿の姿へ。はまいうしきりゆひてのちふ。
言語祖父。うるこ。弱づきゆは侍へ。まゐりて。志
小ゆひ。おそば。悦いうしよ。さしゆひそいうこ

なりけるやらむ。さらまゆ。ゆひ人の語よ。馬教ゆよ
ど殿。そのほの大姉つ。ものもゆちはけむ。
みな。山里へ。まゐらしゆて。清水九ふ。毒酒屋ゆ。
毒義ふはや。落蝶二三日まゐより。死るゆ忍。活生
死乃ほど。心ごとゆは由ふ。
一その落蝶乃まゐ。鉄砲〳〵づのゆやらか産
まゐり。女ゆうらぬ。そのあと。沈玉。活産乃
わきゆ。尚ちに。ゆ。玉ち亀りける。巳の毒。切き
ゆらう。その毒。三十月ばのりどゆ。手ちうらへ

いきて見やゆるなるほどのその程乃まそ。ぞんぜら
れけるそれらそのあまの手かくる。幕張ばら
きやは。

一いらく作。評定毎度法師なしよ。たのしゆるぞ。
けるるそあるそとなすり。

一あ白く。やはり。もちつのれたるとあるその餅
をみなく。おうの間のほぼ絵ごとくばられけ
るそのおうあこそもち銭和まやくろけつぐもど
乃まへふ。一つ宛重て通るのちくハめづらこの

らぬそのあるそのまま。明日まで重もあり。志
こうるそ。ふるそ。ろけ餅を。和きくあるそ。ろおいて。又
今のけもち銭和きけるとぞ。

一天樹院様ほどんそ。ぞけるそ。奏盃
のうて。活もち成ぬ。ぬそ。より出たるうなな
ぐるなふて。活ろみを。すくるそ。ろそ。ろそ。ぬさ
れけ活ろ。

一活猪をば。おそるそより出をぬ。ぬなどの毛
のうるそ。ろそ。ぬと後。活十活乃ものごく味とい
おきく

あし。はこ。ほそば。前へ。わるさ。とき。ぐ。ほそ。
ごの。ほとの。毒味。をして。出。はけ。なり。
一。そのらく。城まへ。京。ほ。より。月山和尚といふ。
東福寺の住僧。ゐねて。まゐり。城。中。さし。ほ。
その人。ま。ぎく。中。ほ。ハ。ま。ぎく。ハ。屋。で。ほ。いと。ま。孫
ごの。ひゃ。ほて。京。ほ。へ。のぼり。ゆ。ほ。百。そ。ほ。ゆ。ぞ。さ。
社。を。ほ。あ。づ。の。り。ふ。ぜ。る。べ。ら。ほ。ま。ぞ。ら。ち。ら。ま。
城。そ。る。ほ。ぐ。ち。ほ。あ。と。ま。ぐ。ら。ひ。下。さ。る。べ。ら。ひ。
と。て。接。ほ。ひ。と。つ。ふ。ま。ま。う。つ。ほ。そ。の。

ども。あ。こ。と。り。ほ。く。月山。ま。た。の。み。き。つ。け。る。と。な。り。そ。の。
道。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
一。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
改。ま。つ。の。ぬ。こ。の。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。り。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
大。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

おきく

我下さま。此時うち死しけるゆへ。その落つき。不
知なり。浪宅そく拝領のちきけし相替らぬゆゑ。
もとより兄のきく我をみて。いとをしきらふすな
はち白布の絹をぬひあはせて。さしそのはして。
つのはしたるその時我たち〳〵ほどびて。むすめふ
も大きなかりけるとや。しそれも。大かたいらま
おひそだてけりしとなり。此義左衛門友堂家へ出き
るまで細工なとに与右衛門といひて。浅井家のあしが
るにてありしその小ぶしらる。娘がまで有しの



ば。おいとのほとの。きみぎり。宮仕貧ふかりし。有
まる朝のそれもおもひ足ざるまいはまし。小義介
妻ごとの其の不便のりて茶づくなどしたびくぬ
るまひけるまもま其後までも義介妻の恩をば。
まさに絶ぬとあこの堂中を達けし。此よしの故
義左衛門つぎも。よびとし志のも容気ずして何れも
家中まそ屋あしらひし志ありけるとなんまうされ
義介ものちまま千二百石まで浅井家にてかり
たるとかり。此義左衛門悴きくがおいて我甚左衛

門にいりて。安藝の國にかへりて。のちに醫者とな
りて。意朴といひける。しかるにその志あるや。しら
ざりしが。菊らく妹乃ときに二千歳のうち備前にて死け
るなりき。い十三歳なり。この為りわはなし。をおくある
とて後意徳そのゝあとなり。此意徳といふはき
くが孫なりに志あるす。すなはち希ふ所の子なる達
し是によりて。かんがう待り。浪華城乃廣大なる鐘
くらの歌ひたるは。ゆまたしぐ人智地もて。筆りが
うち起るを見といひつくられじ。この生をもて。いまゝ比ひ

しかは。まづ筆りかゝきてとれるべし。そもゝの
の菊女は浅井家よりこのたびさそひ祭
らるゝ。法はいくけ。評定なども。天樹院
殿の御はんだしともみんありしほどかなるんに
おいと近く見し。宅はきん。格式も。いりなる
屋しけるにほか。なれのつぼ紛り一嫁に銘じ。そば粉
蕎麦焼き。法堂所へ命りしにても見れ手のるく。
ほどちこの来銭くるべし。まゝ月俸にあづかりし
も。永用に洞度衣服なるべきこのわづかの楼箱

ひとつぶ屋るまで。ふつう。もち出さんとすれども。やはらぬ時なるべけれども。今までは。仙達形き形ふ。おとはれ。ふるまど形の法師ごのほうへ出をバ。必づかくこそ。よくつん様つるまらし。出りて。おのれも。このさま。ふる事なるべし。わたくしふる。様用をぶげ必づ法どてみちゆ。案内しなん。いぬうきこゆなり。すでに。東形法城内出雲乃ごと大おくる形女中。逢方ならしれて。出法ども法をしらで。形類しあり。城バ。形平伴至也屋法さし用まて。法多



必ごと法はまで。ひとる毎まだく美をうらがへ。てふ形用ふるしとぜられ。ふりてやうく。雑をまぬこまたり。その。法へ中形く形屋ふく。代役こうぬる。なごしく必ふ。ふりり大さこの一様となりてハ大間乃代ふ。よろづ手様く。ふりたるべたれと。法猪など。多て法つるさまも。様こしくおぼゆ。され形。こまらは。太平日必ごひはしこうらぶる。ふとも必ふ屋。それうこも。必ぶうきは。秀ふり公形法むま印。姉ゆ夜毎

おきく

陳とも。津川左近釈のゆきぐつかさぐるに所なり。
この孫なる。姫女ちなみをこのりてとづるふるの事哉。
このくせしるやこの侍さまふてこかくふ。活和睦
のおとゆのぶるる。時運とハ。ひなごのらうてて
かりしるなりおれいさきに推事ぶ。歌を馬良
列ふ。あづるるとおの貢覩をこの毒しるてよつ
りて。自宮したる。毒しるも。浮一るを忘滅。哉。この毒し
毒く波きりしる。詩書ふのをりりいづき
このるでし哉やしら事。わをハたるよきくせこの

話社。実なるらんおとをばづるふり。

古阿菊物語一巻、余得諸之友原念
齋念齋家久蔵斯書、但未詳其所出
云、今按、敘事朴率、文無修飾、皆其
所身経目睹、非傳聞也、當時謂、豊太
閤起於微賤、掌握天下、故務逞華
靡、廣侈奉養、以明得志、法今以時攷

必城中仕女若阿菊者衣服飲食真
素簡略必此而紀則其窮奢極欲何
足道也要之亂餘時勢自尔在今承
平日久館舍富貴而不知屬歷者其可
不念哉丁酉十二月善庵老人題

秋巖萩原翠書